

金子兜太俳句と「定住漂泊」の思想

熊谷市立江南文化財センター 山下祐樹

1 白梅しらうめや老子ろうしむしん無心の旅たびに住すむ 『生長』

この句は兜太が旧制水戸高校の一年（十八歳）の時、一年先輩の出沢三太（俳号珊太郎）に誘われて「水高俳句会」の発足句会に出席した際に詠んだもので、兜太自身も「文字通りの処女作」に位置付けている。二月、兜太は水戸の偕楽園を彩る梅の季節において、白梅と老子を結び付け詠み上げたことを明かしている。兜太は「北原白秋の詩で、老子の旅に触れた作品を読んだばかりだった」と語る。北原白秋の詩「老子」には「青の馬に白の車を引かせて、老子は幽かに坐つてゐた。はてしもない旅ではある、無心にして無為、飄々として滞らぬ心、函谷関へと近づいて来た。ああ、人家が見える、馭者は思はず車を早めたが、何をいそぐぞ徐甲よと、老子の微笑は幽かであった。相も変らぬ山と水、深い空には昼の星、道家の瞳は幽かであった」と記されている。中国、春秋戦国時代の楚の思想家である老子は「無心にして無為」からも分かるように自然無為の思想を説いた。この無心無為の道を眼前に捉え、そして白梅が咲いている。この意識内における視線の変化が俳句の中で描かれ、白梅と個人との対照性を躍動的なものとしてさせている。白梅の香りが漂い、寒さが残る寒中にも陽光の仄かな温かさが感じられる。「旅に住む」との一節が兜太俳句の根底にある「定住漂泊」と通じることは偶然であろうか、必然であろうか。白梅との邂逅、その瞬間を経て兜太俳句の長い旅が始まったのである。

2 水脈みおの果はて炎天えんでんの墓碑ほひを置おき去さる 『少年』

兜太は昭和二十一年（一九四六）、二十七歳の十一月下旬、一年三ヶ月間の戦後捕虜を経験し、トラック島からの最後の復員船「桐」で帰国した。この句はその船中で作句されたものである。敗戦濃厚の時期にあった日本軍の状況について兜太は次のように述べている。「戦争末期は戦闘より飢餓との戦いの方が深刻だった。朝目覚めると隣の人が冷たくなっている。餓死だ。それが日常である。餓死の人のおおかたが国に殉ずるといった志もなく、南の島に懂れてきた程度の人たちだった」。国威発揚のもと戦地へ後押しされた若者たちの意識は当初から国家には仕向けられずも、しかし国家の政策によって死するという悲劇の存在となつたのである。兜太は彼らを「非業の死者」と称し、その憐れさを嘆いている。戦地では戦死した人々への慰霊の意が込められ、石製の墓碑が並び立つように建立された。南国の太陽の下、波打つ海際に面しながら、兜太は「炎天の墓碑」に死した人々への鎮魂の想いを寄せ、「私は島を去りゆく水脈の果てにいつまでも墓碑の姿を見つめていた」と語る。「墓碑を置きて去る」。これは戦争で亡くなった人々、そしてその家族たちの失意を代弁しているかのように思える。水脈の果てにて生じた兜太の決意は戦後における新たな覚悟へと変化し、戦争を非難し危惧する思想を形成するに至つたのである。されていったのである。この句は戦争の記憶と平和への希求を結び付ける意味を有し、兜太の反戦意識の高まりを告げる鎮魂碑的作品と解釈することができる。

3 彎曲わんきよくし火傷かしょうし爆心地ばくしんちのマラソン 『金子兜太句集』

この句は長崎の原爆に主眼を置いている。作句当時の兜太の日常と長崎について「神戸から長崎に移って三年居た。被爆から十三年経っていたが、爆心部の山里地区一带はいまだに黒焦げの感じで、天主堂は被爆時のまま崩壊してそこにあった。黒焦げの大地に人は遅しく暮しをはじめてはいたのだが、痛ましかつた」と説明している。この天主堂とは浦上天主堂のことであり、明治二十八年（一八九五）に起工し、大正十四年（一九二五）に完成するまで長い歳月を掛けて建立された。赤レンガ造りで当時は東洋一と称される規模の教会であった。しかし、この天主堂は戦争と原爆という苦難の歴史とともにある。第二次世界大戦末期の昭和二十年（一九四五）八月九日午前十一時二分に、アメリカ軍は長崎に対して原子爆弾を投下した。爆心地から北東へ約五〇〇メートルの位置にあった天主堂は、一瞬にして爆風で崩壊、火災で聖堂や司祭館の大半は焼失した。双塔の鐘楼や敷地内にあった聖人像などの石像も大破する壊滅的な被害を受けた。惨憺たる原爆被害を受けた長崎。その記憶を前に、兜太の想像が歩を進める。兜太は爆心地近くの戦後の状況

を目にしながら、長崎原爆の脅威に着目したのである。「私の中に映像が動き出す。それは周辺の峠を越えてマラソンの一団が走って来たのだが、爆心部に入った途端、たちまち軀が歪み、焼けただれて、崩れてしまった」と。一句に触れる際の冒頭で動揺を与える「彎曲」については、その映像を追いながら兜太が見出した一語である。マラソンの一団が爆心地で彎曲し火傷し崩れ落ちる。この自身の解釈からは、一句に込められた壮絶なる着想性に気付かされるのである。この俳句によって兜太は前衛俳句の旗手として、更には平和思想の論者として位置付けられるようになった。

4

無神の旅あかつき岬をマッチで燃し

『蛭蛭』

兜太は青森の津軽半島北西端に突出する岬である竜飛崎に行き、翌早朝、その突端に立った時にこの句を生み出した。その瞬間の情景について「タバコの火を点したとき、海に突き出ている岩肌にくっきり映えた。あたりはまだ暗く、海峡の白波が目立っていた」と語る。本州と北海道を結ぶ青函トンネルの入口に当たる竜飛崎付近は標高一〇〇メートルの台地が続く、海食崖や海食洞があり、海上には奇岩が重畳している眺望からも地質学上の特異性を感じることができる。「たつぴ」の語源はアイヌ語の「タムパ（刀や突起の意）」で、「突き出た地」から「龍が飛ぶ」という語に転化した。また、太宰治が紀行『津軽』で、「鶏小屋に突っ込んだと思ったら竜飛集落だった」と描写したことで知られている。兜太はマッチで火を起した数秒間に生じた岩肌への陰影に着目した。この視点の移ろいの中で、兜太の感性は「無神の旅」という語を引き出したのである。兜太は神と表現したことに関連して次のように語る。「私は、そのときも今も神の存在を信じるが、特定宗教は信仰しない。その意味での無神論者である。岩肌の焰明りに、不図そのことを思いつ、何となく可笑しかったのである。いや、しみじみと神仏の存在を感じていたのである」。この言述には、生物と無機物を問わず全ての存在の中に靈魂が宿ると捉える「アニミズム」の思想が含まれているといえよう。海岸の風を受けながらタバコを煙らせる男、兜太と、鳥に姿を変えて行き交う無数の靈魂との語らいという想像に至らしめるのである。

5

林間を人ごうと過ぎゆけり

『暗緑地誌』

兜太は、昭和四十二年（一九六七）、北武蔵、埼玉県の熊谷市上之に転居した。この句はその転居後に感じた熊谷の風景を詠んだものである。自らの住まいを「熊猫荘」と呼んだ。兜太は句の描写について次のように説明している。「武蔵野の名残りの雑木林が多く、わが家の庭も雑木が多かった」。この自然風景の中に人間が登場する。兜太は、「その林間を歩いている人に、この土地の歴史を思い、背負ってきた運命を思う」と記している。これに加えて、自身の家族がここに住み始めたことへの想いを明らかにし、「そしてここに土地を得て住むようになった私たち夫婦の背負ってきた、これからも背負う運命を思っていた」と語る。轟くような音を意味する「轟々」または、喧しくも力強い一様を示す「轟々」からも、雑木林を行き交う人々の流れが生命力溢れる情感として叙述されていることが分かる。兜太は運命や宿命とともにある人間の在り方に焦点を当て、雑木林を進み行く人間の可能性に希望を見出しているように思える。この句は北武蔵の熊谷の風景を表象することから、或る意味、熊谷らしさとは何かという解釈を併せ持っている。詠まれた当時、兜太が転居した熊谷の上之地区には多くの雑木林があり、ケヤキ、クヌギ、コナラ、アカマツなどの多様な樹木が育まれていた。屋敷林としても管理がされてきたが、市街地にも近い上之地区はその後において住宅開発などが進み、人々の生活を包み込むような雑木林は次第に減少した。この句はその当時の記憶を残すとともに、「不易流行」の意味や、時代変化に対する幾許かの達観を含んでいるとも感じられる。また、林間という表現については、現物の森林そのものとは異なる意識内での「森林」という解釈も可能である。自然の源泉であり、人々の知識の宝庫としての森林を意味しているのかも知れない。あるべきものへの着眼、なくなつたものへの懐古などに想いを馳せながら、不易流行という林間の中で人間がいかに思索を進めているか、いかに歩行しているかという観点にも想像が広がるのである。

6

わが世のあと百の月照る憂世かな

『狡童』

短歌、俳諧の歴代の作例の中で「月」を主題としたものは無数にある。この句には兜太が捉えた死生観と、そこに付随する月への想いが描かれている。兜太は次のように語る。「自分が死んだ後も、今と同じように生きることの難渋の世さ。月は毎晩でること変わりはないだろうが」と。「百の月照る」と諧謔的に詠み、「憂世かな」の一節へと結び付けながら、生きることに對する悟りが込められているように感じられる。月と向き合う詩歌を見出す時、西行法師「願わくば花のしたにて春死なんそのきさらぎの望月のころ」や、大江千里「月見れば千々に物こそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど」、壬生忠岑「有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし」などが想起され、そこからは情

緒溢れる中にも儂さや、月を情感的に感受する一様が感じられる。また、寒月、月暈、皓月、孤月、霽月などを端緒例として、月を冠した言葉や月を表現する言葉は多様にあり、日本文化や文学における繊細なる感覚や風情ある写生的技法の在り方を今に伝えている。兜太は長い時を経て積み重ねられてきた月に関する表現の素地を踏まえて、人間の一生という儂さと月の半永久性を融合させながら、現世と来世への想いを語り掛けている。そして、この句からは一つの故事が思い浮かぶ。「嘯風弄月」という月の故事で、「風にうそぶき月をもてあそぶことから、自然の風景を愛で、風流に心を寄せること」を意味している。兜太が詠んだように、人間が眺める先には「百」と形容される月の多様な印象が到来する。月の満ち欠けとこの繰り返しの繰り返しの経過を受容するとともに、その早さを実感することで、我々も死期に少しずつ近づいていることを改めて意識することになる。

7

うめき

にわじゅう

あおさめ

き

梅咲いて庭中に青鮫が来ている

『遊牧集』

この句は兜太俳句の中でも一つの記念碑的な側面を持つて多くの人に愛好されている。兜太はこの句について「自家の庭に白梅紅梅が数本あって、白梅が咲くと春と知る。今年の春も白梅が教えてくれた。戸を開けると白梅。気付くと庭は海底のような青い空気に包まれていた。春が来たな、いのち満つ、と思ったとき、海の生き物でいちばん好きな鮫なかでも精悍な青鮫が、庭のあちこちに泳いでいたのである」と説明している。この句は、熊谷の上之にある自邸「熊猫荘」の庭を舞台として、その想像の景が訪れた時に咄嗟にできたこととされ、「春到来を大いに喜んでる作」と解釈を加えている。バラ科の落葉高木である梅は、早春になると葉より先に白や淡紅色、紅や黄色などの香りの強い花を咲かせる。葉は卵形で縁に細かく鋸刃に似た線がある。一方、到来した青鮫はネズミザメ目の海魚で、本州中部以南の暖海に広く分布している。性質は凶暴で、成長すれば全長約四メートルに達するとされる。体は紡錘形で、腹は白色、背が濃青色であることから青鮫の名称が付いた。梅の香り漂う中、大型の青鮫が泳ぎ回る光景を想像する。早春の日差しが海底まで辿り着き、力強く躍動する鮫を映し出す。こうした映像的な印象を含み、兜太俳句の真骨頂ともいえるべき無類の迫力が感じられる一句である。前衛俳句の旗手である兜太が、自然を見て自然を主題とし詠んだことに対して、珍しくもあり、奇異なるとの指摘を受けたことであるが、この句について、兜太は社会と自分との関係を見つめる若き時の社会性俳句からの変遷として、自然や天然に着目した時期の作であることを明かす。また、兜太は「天然と人間を含めて自然」という認識に立ち、「草や木、動物たち」と称されるのは天然のもので、これに人間を加え、両方を含めて「自然」と呼称することを説明している。自然界を超越した一存在と二存在の語り合い。兜太の眼前には本物の青鮫が来ていたのかも知れない。

8

たにまたにま

まんさく

さ

あらほんぶ

谷間谷間に満作が咲く荒凡夫

『遊牧集』

この句は兜太が俳句の重要な先覚者として評価する小林一茶との意識的繋がりを原点としている。兜太はこの句と一茶との関わり、更には兜太自身の生き方に準えて次のように記している。「小林一茶は六十歳の正月、荒凡夫で生きたい、と書きとめていた。つまり愚のままに生きたい。愚とは煩惱具足、五欲兼備のままにということ、とも書いていた。私は荒を自由と受け取っていて、人さまに迷惑をかけずにこれで生きられたら何より、と思っている」と。一茶を象徴する「荒凡夫」に一つの句の理念を想起し、影響を受けた兜太の自由を引き合いに出しながら、ここに兜太ありと高らかに語るようである。これに加えて、一茶の感性に着目し、一茶の場合は「生きもの感覚」―生きものを生きものとして自ら感応できる天性―に恵まれて、特に迷惑をかけることはなかったとの解釈が示されている。兜太はこの一茶に対する称揚を原点として、地元秩父の道を歩く瞬間へと意識が辿り着く。兜太は「一茶のような荒凡夫で、という思いのなかで、秩父の里山を歩いていると、小刻みに谷間があり、どこにも満作の素朴な黄の花が咲いていたのである」とこの句の情景を述べている。これは「一茶のようだ」と自らを捉えながら、道程を叙述したものである。小林一茶（一七六三―一八二八・宝暦十三年―文政十年）は、江戸時代後期の俳人で、現在の長野県の北部、北国街道柏原宿出身。若年より江戸に出て葛飾派の二六庵竹阿に俳諧を学び諸国を行脚した後、晩年は故郷に定住している。生涯を通じて俗語・方言を交えた上での屈折した感情に基づく独自の作風を展開したことで知られる。句著作には『七番日記』『おらが春』『父の終焉日記』などがある。兜太が著した『荒凡夫 一茶』の後書きには、「青年期から一貫して自分を支配していたのは、自由人への憧れでした。なかでも一茶の故郷・柏原と私の故郷・秩父が上武甲信の山続きであることが、余計に親しみと懐かしさと呼び寄せました。そこでますます病みつきになったのです。山というものは、案外奥深いものです」と記されている。本句はこの一節に含まれるような茶に対する視線と密接に関わり、兜太と一茶を結び付ける架け橋としての意義を含んでいる。

なが
もと
おも
おも
流るるは求むるなりと悠々悠々

『詩經國風』

兜太は『詩經』の「國風」に記された「左に右に之を流（もと）む」「寤（さ）めても寤ても之を求む」「悠（おも）う哉」という詩に着目し、中国文学者の吉川幸次郎が「求」は「流れに沿うて求める意」で、流と求をともに「もとめる」と読むと注に記していたことを引用している。また、「悠々」の読みは中国の古注によるものである。兜太は「私はこの、読みからくる内容の受け取り方がおもしろくて句をものした。そして流浪は求めの故なり、と自己流で受け取り、求めに向かつて物思うときは悠々たるべし、と勝手に決めて、纏めた」と作句に向けての動機について語っている。そこには「悠々と思う」とも解せる端緒もあるが、流れに沿う欲求や要望の在り方を示しているともいえる。冒頭の「流るる」を捉える時、そこから「流転」という語句が想起できる。これは「万物は流転する」ごとくに移り変わって留まることがない意味へと繋がり、また、仏語の一つとして、六道・四生の迷いの生死を繰り返す、生まれ変わって、死に変わって迷いの世界を流離う（さすらう）ことの意味へと結び付く。句の中にある流れは何らかの求めに応じてのものであるか。そしてまた、動的なる現象の要因と結果は何であろうか。一句の感受後このような問いについて思い巡らすことは必然的である。いつの季節とも問わず、先にあるものに対して求め、そして自由に思いを馳せる。時の流れを受け入れ、流浪の旅を続けることで見えてくる世界があり、見えてくる自分自身がある。この句はあなたも兜太という吟遊詩人が語り掛ける現代詩のようである。まさしく古代に大陸から伝わった言の葉が、現代に新たな地平を広げてくれるのではないかと連想できる一句である。

たつぷりと鳴くやつもいる夕ひぐらし

『皆之』

北武蔵・熊谷の郊外、上中条にある古刹の常光院がこの句の舞台となっている。兜太は、「私のいま住んでいるところに近いその名刹の庭に立つと、晩夏の夕暮れなぞ殊にひぐらしが湧き立つように鳴いている。なかにはたつぷりと鳴くものもいて、単調ではない」とこの句の原風景について語っている。また、「やつ」と友のような気持ちで呼び、その鳴き声に魅了されていたことを明かしている。この句の解釈とともに、「郷里の山国秩父の晩夏も同じようにたつぷりした、ひぐらしの声に浸っていたものだった。その懐しさ」と思い巡らし、ひぐらしの鳴く夕暮れ時の印象と故郷秩父の記憶とを重ね合わせるのであった。ヒグラシ（蝸）は、昆虫綱の半翅目、セミ科に分類される。体は黒色で、茶色や緑色の斑紋がある。雄の腹部は大きく空洞で共鳴を齎し、独特の鳴き声を発する。七月から九月に出現し平野や山間部の森林に生息し、明け方や夕方に「キキキ」という高い声で鳴き、また「カナカナ」という鳴き方が俗名となっている地域もある。たつぷりとこの鳴き声を発する「やつ」への愛着が、郷土の自然に対する温かな視線の表れとして感じられるのである。この句の石碑は常光院本堂の南側にあり、常光院の森を見つめ続けている。常光院は平安時代から鎌倉時代に掛けて当地を治めた武家の中条氏の館に由来し、茅葺屋根の本堂が象徴的に映る。また、常光院に生まれた俳人の宇咲冬男は国際的な俳句活動を進めたことで知られ、俳句寺の名を広めた。兜太「夕ひぐらし」の句碑に近接して冬男の「行けどゆけど大虹のしたぬけきれず」という句碑と、国際俳句連句碑などが建立されている。この句は、北武蔵の自然の中に兜太あり、俳句ありという意識を強くさせてくれる。

よく眠る夢の枯野が青むまで

『東国抄』

作句後、兜太はこの句について芭蕉最後の句「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」を反映させた本歌取りの句と述べている。松尾芭蕉（二六四四〜一六九四・正保元年〜元禄七年）は、自然や庶民生活の詩情を余韻豊かに表現し、蕉風俳諧を打ち立てた。東北路への旅を始めに諸国を旅し、『野ざらし紀行』『奥の細道』などの俳諧紀行集を著している。芭蕉は九州へ向かう途中の大坂で没し、その直前に詠んだ「枯野」の句は、「旅の途中で病床に臥しながら、夢の中では、なお枯野をかけめぐっている」「芭蕉事典」春秋社」との句意がある。病の中にありながらも再起を期して旅を想像する。それは現状に落胆し悲しみの感情も含まれているように思える一方で、空想の先にある希望が見出せる。この芭蕉句を起点として自身の句を捉えた兜太は、自由かつ樂觀的な側面に重きを置いている。よく眠り、よく旅をし、思うがままに俳句を詠むことへの憧れと実践。このことは兜太が語る「漂泊」の特質であり、兜太俳句の世界観を形作っている一つの理念である。「枯野が青むまで」の表現では新たな芽吹きが予期され、先を見据えたような希望が見え隠れしている。芭蕉の一句を見つめながら兜太は「八十代にちかい自分の夢と、五十二歳で没した芭蕉の求めるものへのきびしい夢の違いに恐れ入った次第である」と語る。これは俳聖に対する敬意の表れであるとともに、古典に対する確か

な意識を含有している。兜太は「ともかく芭蕉は芭蕉、兜太は兜太、ゆっくり生きてゆこうの心意」と本句に潜在する芭蕉への意識を示しながら、自らの俳句と向き合う決意を強調している。芭蕉から兜太への俳諧史を傍観する時、この句は両俳人を結ぶ稜線として歴史的な意義があり興趣に尽きない。

12

おおかみに螢が一つ付いていた

『東国抄』

「おおかみ」と「螢」の描写は兜太の原風景と密接に関係している。そこには「産土」という概念が強く作用している。晩年を生きる兜太は次のように述べている。「七十歳代後半あたりから、生きものの存在の基本は土なり、と身にしみて承知するようになって、幼少年期をそこで育った山国秩父を産土（うぶすな）と思い定めてきた」と。産土とは生まれた土地を意味し、先祖伝来や自分の生地を出自意識をもって表現する言葉であり、その地の守護神を産土の神と呼ぶ。兜太は秩父を想いながら、産土とおおかみを結び付けて、「そこにはニホンオオカミがたくさんいた。明治の半ば頃に絶滅したと伝えられてはいるが、今も生きていると確信している人もいて、私も産土を思うとき、必ず狼が現れてくる」と語っている。ニホンオオカミは、ヤマイヌ（山犬）とも呼ばれるオオカミの一種で、食肉目イヌ科の哺乳類に分類される。かつて本州、四国、九州に分布していたが絶滅したとされる。秩父はヤマイヌの伝説による民俗文化が色濃く残されている地である。そして兜太は狼の幻想を見る。「群のこともあり、個のこともある。個のとき、よく見るとに土に立つ」と。この句の醍醐味は狼と螢の対比にある。産土に息衝く狼の想像と、瞬く光陰の動的な印象が交わりながら、本句からは夏の一風景と強かな生命力が発せられている。螢が一つ付いていて、瞬いていた。山気澄み、大地静まるなか、狼と螢、（いのち）の原始さながらにじつに静か

13

定住漂泊冬の陽熱き握り飯

『日常』

「定住漂泊」という兜太文学の基本思想ともいうべき主題がこの句の基礎となっている。兜太は、「定住漂泊こそ社会生活を営む人間の有り態と、私は考えていて、いま冬の陽を浴びて握り飯を食いながらも、そのことを思っている。そのせいか冬の陽ざしが妙に熱い。私自身その有り態にこだわりのゆさぶられているせいだ」と本句について解説している。「定住漂泊」とは体験を通しての発見であり、生き方のひとつの提案であるとして、兜太は「とどめがたき漂泊心を、定住者こそエネルギーに、バネに」と語り掛ける。加えて、現代の状況にこの定住漂泊を当て嵌めながら、「現代において―相応の物質があり、日々を糊塗しうる小歓楽があり、ささやかな愛憎があれば、それが流魄を癒すというのであるか。それだけに、定住漂泊者のみが、もがき、あせり、喚び、そして、ときに確然と無に立ち、ときに飄々と自然に帰してゆけばかりである」と言及している。そして、「彼らの屹立自体が、まことに孤立的なのだ。人は自分たちでつくってきた社会でなんとか生きてゆこうとして『定住』をもとめて苦労している。そのためかえって、原始のアニミズムの世界を良き原郷として、そこに憧れて、こころさまよう」自著『酒やめようかどの本能と遊ぼうか』ということを提起している。兜太は自らを「荒凡夫」と呼び、アニミズム的な人間の存在理解に向けた俳句の可能性を信じ、「定住漂泊」の思想を基軸に据えたことが考えられる。冬の陽を感じながら握り飯を食らうという表現からは、この思想に対する兜太の情熱を見出すことができる。

14

利根川と荒川の間雷遊ぶ

『熊谷の俳句』

この句は、「利根川」と「荒川」という二つの大きな河川に挟まれていた熊谷の特徴を描き、その狭間にて鳴り響く夏の雷を捉えている。二つの大河をまたぐ熊谷は、川の恩恵を受け、時には川の脅威と向き合いながら、地域の特徴を育んできた。夏の夕暮れになれば、古くから上州と北武蔵の風土を象徴する雷が到来し、熊谷にも多くの雷鳴と雨を齎す。二つの河川の存在がここに住まう人々の感性や精神に大きな影響を与え、長い時を経ながら熊谷の原像を形成してきた。雷鳴の躍動感とともに、熊谷に息づく自然の景観と夏の風景を力強く表現している。七月、熊谷の夏の風物詩である熊谷うちわ祭が開かれる。豪華絢爛なる山車・屋台が華々しい一大絵巻を繰り広げ、各所では勇壮な熊谷囃子が叩き合う。雷が遊ぶように囃子と鳴り響き、熊谷はいよいよ本格的な夏を迎える。

15 かわ 河より掛け声さすらいの終るその日 おわ

俳誌『海程』より遺作

兜太の遺作である九つの句が、主宰する俳誌『海程』二〇一八年四月号に掲載された。兜太は最晩年でも常にペンと原稿用紙を身近に置き、俳句を書けるようにしていたという。体調が崩れる中、それでも最後まで俳句への情熱を燃やし続けていたことが分かる。兜太は二〇一八年一月月上旬に発熱して入院し、同二十五日に退院した。それから再び入院した二月六日まで日中は熊谷市の自宅で、夜間は安全のために自宅から車で十五分程の荒川近くの高齢者施設で過ごしていた。この遺作となった俳句はこの間に詠まれたものであり、再入院する二日前の二月四日に清書し、長男の眞土氏の妻の知佳子氏に手渡したという。この句を含めた九句のうち四句には「さすらい」という言葉が記されている。兜太は若くして独自の自由俳句の水脈を築いた頃から晩年に至るまで、俳人の軸ともいえるべき「定住漂泊」の思想を持ち続けていた。兜太は、地に足がついた暮らしを大切にしながら、心は自由に彷徨い、旅をするというこの思想に俳句の理想を見出していった。このことはまさしく「さすらい」という一語と符合する。この句では「さすらいの終り」を期する内容であるが、現世において施設からほど近い荒川から聞こえる掛け声という生き生きとした描写から始まる。自身のさすらいの終わりと、その響き渡る声との対比によって、この句の中に兜太の叙情性が強く凝縮されている。自宅と施設の行き来を今ある最後のさすらいと捉え、懐旧の念とともに、人生の中で辿り付く一つの場所を描き出した句であるとも考えられる。

16 ひ やわ ある 陽の柔ら歩ききれない遠い家 いえ

俳誌『海程』より遺作

兜太遺作の九句、その末尾に記された一句は兜太が生前に残した最後の作品となった。二〇一七年末から二〇一八年一月、二月に掛けて北武蔵の熊谷は近年稀に見るような厳冬が続き、珍しく降雪もあった。遺作の中には「雪晴れに一切が沈黙す」「雪晴れのあそこかしこの友黙る」「犬も猫も雪に沈めりわれらもまた」「さすらいに雪ふる二日入浴す」の四句を主題としている。熊谷は雪の少ない地域ではあるが、この時期における何度かの降雪のほか、赤城山から吹きすさぶ「赤城おろし」による寒冷風も例年以上に強く熊谷に本格的な冬の気候を齎していた。そのような中、気温は低いが陽光が街を照らし仄かな温かみを感じることもあった。この句からは、降り注ぐ柔和な光を身に受ける兜太の姿が想像できる。自宅と施設の行き来の中で、車では間も無くであるが、歩くとなれば辿りつけない道を「遠い家」と表現している。兜太は死を意識して辞世の句を詠む発想はなかったといわれている。「死ぬことは他界に行くだけの話」とも捉えていた。芭蕉の「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」の本歌取りとして、兜太は「よく眠る夢の枯野が青むまで」と詠んだ。この句からも分かるように「さすらい」を続けた兜太の思考は、最期に至るまで死を意識するのではなく、身近な日常にある生に目を向けていたことが分かる。この句は遠い家への想いを叙述したものであると同時に、それは熊谷か、秩父か、いずれにしても兜太の原郷を意味しているように思える。この句は兜太が生きたことを伝える証として、永遠に残り続ける重く美しき足跡となった。

定住漂泊の模式図

